

あかあまん

プランニング・デザイン・総合印刷・オンデマンドデジタル印刷・可変データ印刷
大判ポスター出力・データベース・PDF高速データ変換・CD-ROM制作・
3D・CGアニメーション企画・制作



半田中央印刷株式会社

〒475-0032 半田市潮干町1番地の21
TEL <0569> 29-2525 (代) FAX <0569> 29-4500
E-mail: main@handa-cp.co.jp http://www.handa-cp.co.jp

わが町、わが店、この道一筋。出逢いとコミュニケーション あかい新聞店ホームページ http://www.akai-shinbunten.net <発行所>あかい新聞店 武豊店/知多郡武豊町字金下37番地 ☎<0569>72-0356 常滑店/常滑市市場町4丁目167番地 ☎<0569>35-2861 企画・制作：株式会社新聞ビル

元氣のでてくる「ことばたち」 151

村上信夫 (アナウンサー)



かくなつた……。健康志向の時流にのり、大好評を博している。
1948(昭和23)年生まれの寺田さんは、7人兄弟の末っ子。泣き虫の、しょうべんたれだった。人前で話せな

紀元後の寺田さん
35歳にして、人生の大転換がやってきた。十二指腸潰瘍を経て、腸が腐る病気になるのだ。下着に膿がついたが、痛くも痒くもないので、1年も放置しておいた。あまりにも長く続くので、診察を受けたら、直腸の管が腐る病気と診断された。進行すると、手術して「人工肛門」生活になるところだった。辛うじて、一歩手前

■村上信夫プロフィール
NHK エグゼクティブアナウンサー
1953年、京都生まれ。明治学院大学卒業後、1977年、NHK入局。富山、山口、名古屋、東京、大阪に勤務。現在は、『ラジオビタミン』担当。(ラジオ第一 8:30~11:50) これまで、『おはよう日本』『ニュース7』『育児カレンダー』などを担当。教育や育児に関する問題に関心を持ち続け、横浜市で父親たちの社会活動グループ『おやじの腕まくり』を結成。趣味は、将棋。著書に『元氣のでてくることばたち!』(近代文芸社) 『おやじの腕まくり』(JULA出版局) 『いのちの対話(共著)』(集英社) 『いのちとユーモア(共著)』(集英社)

それ、いいね 〜造り酒屋当主 寺田啓佐さん〜

紀元前の寺田さん
千葉県の神崎町(こうさきまち)にある創業340年の老舗の造り酒屋・寺田本家の23代目寺田啓佐(けいすけ)さん。寺田さんが心がけているのは、戦前に存在したような「百薬の長」としての酒造りだ。
戦後、ほとんどの酒屋が、添加物だらけの即席の酒造りに転じてしまった。原価を安くして大量に造った。アルコール添加の甘みのあるペトベトした酒になってしまった。そんな状況を憂えて、微生物の力を借りて添加物の混じらない純粹な酒造りに取り組んでいる。
例えば、寺田本家には、7年の歳月をかけた「発芽玄米酒」がある。玄米の胚芽部分には抗酸化作用のあるビタミンやミネラルがある。腸内のバランスを整え、血液も浄化する作用がある。玄米には、健康維持に必要な「生命力」がある。「玄米の生命力」を生かした、精米歩合100%の「玄米酒」を目指した。玄米の殻が堅く、発酵がうまく進まず、玄米を煎ったり、二度蒸したり、棒で叩いて殻を破ってみたり……。試行錯誤を繰り返したが、伊勢神宮の古代酒の資料にヒントを得て、玄米を発芽させたら発酵に成功した。
酸味が強く、香りも独特。飲んでいううちに癖になる。血圧が下がった、花粉症が改善された、便秘しなくなった、よく眠れる、手足が温

い対人恐怖症だった。大学を中退して、父の経営する電化製品の販売会社で働いた後、1974(昭和49)年、酒は飲めない、酒造りをまったく知らない状態の寺田本家に養子に入った。
高度成長期、どんな酒を造っても売れた。「酒は百薬の長」らしいが、そんな謂われには無縁な「売ればいい」という姿勢だった。だが、日本酒の売れ行きは、石油ショックを境に右肩下がりになっていく。
そういう状況に陥つたことを寺田さんは「世の中が悪い!社員が悪い!」と思っていた。自分だけが会社を背負って生きていこうと思っていた。そんな寺田さんに愛想を尽かし、杜氏や番頭がやめていった。夫婦喧嘩が絶えなかった。「賭け事」にもめり込んだ。仕事の不満が、博打で紛れる訳もなく、ストレスは限界に達していた。

で最悪の事態は免れたが、腐った部位は全て切除した。2週間の入院で、50本のタバコに、3食かつ丼のような肉食系人生を猛誓した。本気で「生き方」を考え始めた。反自然的な生き方や、不調和の積み重ねが「腐る」という事態を招いていたことに気づいた。「発酵」と「腐敗」は紙一重ということに気づいた。発酵していれば腐らないことに気づいた。ナスもキュウリも放置すれば、腐るが、糠味噌の中では、いつまでも腐らない。日本の発

酵食品の代表である味噌や醤油が製造過程で腐ったという話は聞いたことがない。味や香りを変化させながら、腐ることなく成熟させ発酵していくからだ。「発酵」も「腐敗」もメカニズムは同じ。どちらも微生物が生産した酵素の働きによって、有機化合物が分解され、別の物質を創り出す現象だ。その物質が、人間に有益なら「発酵」と呼ばれ、有害なら「腐敗」と呼ばれる。
変化を続ける限り「発酵」。変化が止まれば「腐敗」。自分は体や心も腐敗していた。自分が、自分の「我意識」は「腐敗」。利益や欲を捨てた純粹な意識は「発酵」。「自分も発酵している」、会社も発酵している」と思い直してからの人生は、紀元前と紀元後のように変わった。
まずは、原料の見直しから始めた。農業も化学肥料も使わない米を使い始めた。これまでの3倍経費がかかったが、儲けは捨てた。自分の都合は捨てて、相手の喜ぶことを第一に考え、「人の役に立つ酒造り」がテーマになった。
「日本酒は、「発酵の力」によって生まれる。コウジカビ」と云う微生物が、米のデンプンを糖に変える。「酵母」と云う微生物が、その糖をアルコールに変える。「微生物」は酒蔵の中に棲んでいる「蔵付き酵母」。蔵の中の天井や土壁、柱、木桶などに微生物は棲み付いている。自然に存在する「微生物」に寄り添い、その生命力自体を生かそうと決意した。
微生物たちから教わったことは大きい。彼らの役割を心得た働きぶりは見事だ。使命や役割が終わったらスムーズにバトンタッチしていく。多種多様な微生物が参加することによって、命の宿った酒が出来る。
微生物の世界は、「自分らしく、楽しく、仲良く」。微生物は、何一つ、求めない。空っぽに

フルート奏者として活躍中。俳画家。絵画を幼少より日展画家の(故)川村行雄氏に師事。俳画を華道彩生会家元(故)村松一平氏に師事。俳画の描法をもとに、少女、猫等を独自のやさしいタッチで描いている。個展多数。

講師 **イネ・セイミ**
フルート奏者 指導歴30年
1レッスン・時間5,000円(チャイムタイム付)
申込み 0569-89-7127
お問合せ scimline@oasis.ocn.ne.jp

俳画教室開講中
とき 常滑屋 月一回 第二・第四金曜日 午後一時〜三時
会費 一回 二,二五〇円(三ヶ月分前納制)
問合せ ☎〇五六九(三五)〇四七〇

好評発売中
ことばのビタミン
村上信夫



俳画/イネ・セイミ

新シリーズ ヒューマンライフ

『新・現代家庭考』就職

—自分ドラマつくろう— (2) 岡田 清治

裕美はなにかもの憂げな様子である。真三は重苦しい雰囲気を感じたので、話題を変えてから本題に入ろうと考えた。

「ところで、両親はいいですか」「はい、相変わらずの生活です。父が病院で薬をもらって...」

「父はいわゆる物忘れ程度だったと思っていましたが、どうもおかしいなと思ったのは、おカネの勘定を間違いだしたことからでした」

「なるほど」「夕方、機嫌よく帰ってきました。居間でお茶を飲んで...」

「母も初めはそう、思ったそうです」「母が街に出る父に一万円を持たしたのです」

「母が盗ったのだ」「お前が盗ったのだ」

「それで近くの医院で診てもらったのですが、軽度の認知障害と言われ、しばらく薬で観察しましょうということになりました」

「この病気が初めは日付が分からなくなる、おカネの管理ができない、薬の管理ができないなど、徐々に日常生活に支障が出てくるそうです。やがて自分の居場所が分からなくなり、徘徊を始めるそうです」

「そんなと、やっかいですね。私の友人の話や、自分や妻の認識がなくなり寝たきりになる両親はほとんどの場合、病院とか施設に入れていくようです」

「ただ、病院は三ヶ月経つと追い出されるので、大変だと...」

「就職は嫌だということです」「もう、就職は嫌だということです」

「就職しないで、何かやりたいことでも...」「数日、部屋に閉じこもり状態で、ろくに食事もしないのです」



インド洋に浮かぶ美しい島国・セイシエルの海岸 (著者撮影)

※この物語に対する読者の方々のコメント、体験談を左記のFAXかメールでお寄せください。今回は「就職」についてです。物語が進行する中で織り込むことを試み、一緒に考えさせて頂きます。FAX: 0569-34-7971



プロフィール 著者: 岡田清治(おかだせいじ) 一九四二年生まれ ジャーナリスト (編集プロダクション・NET108代表 著書に『心の遺言』 『あなたは社員の全能を引き出せますか!』 『リヨンで見た虹』など多数)

「舞さんはとくにした仕事があるのでしょうか」「よくわかりませんが、中学の頃からやっていた吹奏楽部のある会社を選んで受けていたみたいです。とくに専門の技能もなく、勉強もしていませんから...」

「そういって会社は大企業ですね。今の時代、インターネットが発達しているおかげで、簡単に受けられるようになっていますが...」

「よくテレビで学生が「七十社受けましたが、内定ゼロです」と語る映像が流れる。それだけ見ると、大変だなと思ってしまう。どうして何十社も受けられるのか疑問に思う。いまはインターネットの時代である。企業は求人差別していると思われたいか、一般に窓口をオープンにしている。だから学生はチケットを購入する要領で応募する。人気企業には全国から何万人もの応募がくる。担当者はいちいち読んでいないので、学校、学部名を見ながらはねる。そこではねられた学生も応募数に数える。せめて最終面接した企業数に絞ると、そう多くの企業数にはならない。人気企業や大企業中心に選んでもなかなか就職はできない。何をしたいかという基準で、大手がダメなら中小企業を選ぶような選択方法を考えないと、いつまで経っても就職は難しい。そういう話を真三はした。

「二年前の同時期の大学八八・二% (厚生労働省)と比較しても約二割ダウンだから厳しいことは確かですね」

「六〇%台とは厳しいですね」「大学、短大も含めての進学率は五三・七%と上昇を続けています。とくに女子の進学率が男子を上回っています。短大へ進学する学生も減ったとは言え多く、高給を出しても腰掛ですぐ退職するため、企業から敬遠されている傾向はあるようです」

「もう一つは昭和四〇年代の大学数と比較して今は倍以上あります。大学は本来、研究や教育の最高機関であるはずですが、平成に入って雨後の竹の子のように増え続け、英語、数学、国語といった基礎学力が中学生以下という大卒者も多いと聞きます。とくに文系は専門がない学生が、大学へ通いながら専門学校へ入って資格取得を目指す者もいます。就職率を平成以前の大学数と比較すると、そう悪くないはずだと言う人もいるくらいです」

「真三は話が横道にそれ、しかも説教じみていることに気付いた。いや、舞さんは大卒です、特技が音楽ですからいいと思いませんか...」

「その音楽ですが、中学校の部活で吹奏楽バンドに入り、中部地方のコンクールで入賞するなどしたものですから、勉強そっちのけで音楽にのめり込んでしまいました」

「いやいや、そのことはすばらしいことですよ。確か金管楽器のチューバをやっておられましたよね。中部地区の決勝に出られるという案内をいただき、聴きに行ったことを思い出しました」

「あの楽器は肺活量がいりますので、練習も運動部と同じように走ったり、体操したりと身体を鍛えるそうです」

「そうですね。あれだけ大きい楽器だと、当然のように気がします」

「それで高校も地元の県立高校へ入って、やはり吹奏楽の部活を続けました。それで勉学の方は三年生になって塾にも行きましたが、希望の大学には入れませんでした」

「いや、京都のK女子大なら立派なものですよ」

「教育学部に行って、教員免許でも取ればよかったのですが、現代社会学部に入ったのです」

「舞さんのお父さんがマスコミ人だったから、同じ道へ進むと思ったのではないですか」

「どうでしょうか。とにかく大学でも同好会のようなところに入って、チューバをやっていました。この楽器では音楽教室の先生の口もありません」

先月、和歌山県中部の湯浅町に行った時のことを思い出した。真三は店を転売してから趣味の写真撮影で日本の原風景を求めて旅をするようになった。湯浅町に出かけた。ここは醤油や金山寺味噌の発祥の地で江戸時代の面影を残している。冬場は天然のクエを食べさせる料理旅館もある。湯浅町と広川町の間を流れる広川では、毎年春先の二月下旬から三月下旬にかけて、産卵のため河川を遡上してくるシロウオを四つ手網といわれる特殊な網で掬い取る漁法(四つ手網漁)が行われ春告げる風物詩となっている。この街並み保存地区を撮りながら歩いてみると、ある老人から声をかけられた。

「このあたりはいい被写体ですよ」

「そうやって道路沿いの自分の仕事場に案内してくれた。若い時は絵画をやっていたのですが、親から絵では飯が食えないと言われ、嫌々、教育大学に行つて数学の教員免許を取りました」

仕事場では好きな絵画や彫刻をしながら余生を楽しんでいる。もともと素封家だったが、戦後の農地解放で田畑を没収された。当時は東京美術学校(現東京芸大)を出ても就職口がなく辺鄙な中学校の絵の教師になるのも難しかったそうだ。彼は数学の教師をしながら戦前、戦後を生きた。昭和初期を舞台にした小津安二郎監督の映画『大学は出たけれど』は、大卒就職率三〇%で職に就けない男が奔走するさまを描いたもので、流行語にもなった。

「だけど、このままだとフリーターかニート族になりかねないですね」

「舞は外国に行くと言っています」

「ええ、外国ですか」

「今時の学生や若者は外へ出たがらないようですから、外国へ行くと言つるのは前向きですね」

(続く)

連載●ほりお教授の紀行文学シリーズ

ロマンチック沖繩旅物語

第四回

ああ、ひめゆりの少女たち イン糸満

堀尾 幸平

早朝、那覇空港の近くでレンタカーを借りた。シボレー・コルベットコンバーチブル。左ハンドルのアメリカ製のスポーツカーである。

そのレンタカー店は乗り捨てできるので都合はいいが、それでも従業員が一応行き先を聞いてきた。

「風のむくまま、気のむくまま。まあ、糸満市のひめゆりの塔あたりまで、かな」

ぼくは、そう答えて、すぐにエンジンをふかした。乗り心地も車の響きも申し分ない。とたん、ぼくの気分のテンションもあがった。

とにかく、今日は、仕事を離れて気ままなドライブを楽しもうと思った。那覇市街をぬけて、すぐ右に出て、なかなか海岸線を走る。道路もきちんと整備されていて、エメラルド色の海が、フロントガラスいっぱいに広がってきてまぶしい。デラックスで途方もなく大きな沖繩の海の真ん中を走っていくような気分になる。空も南国らしくカラッといて、さわやかな窓からの風が、快よく頬を撫でつける。デイゴやハイビスカスの花が後へ流れていく。

ハイビスカスは、恋の花
君のハートの においがするよ
沖繩の陽気で開放的なリズムに、つい、鼻歌まじりの気分になって一〇〇キロを超えそうになるので、時々エンジンブ

レーキをきかせなければならぬ。三〇分ほど走行した頃、左前方から、若い女性がハンカチを振りながら走り出て来て、真ん中で通せんぼをするように立った。

驚いて停車すると、明るい服装の若い女性が、

「キヤー、ステキなクルマですね。何というクルマですか？」

「シボレーのコルベット」
「聞いたことはあるけれど、あたし見たのは初めてだわ。かっこいいですねえ」
ギヤルたちは口々に「シボレー」「シボレー」とつぶやきながらうっとりクルマをながめた。

「いったい、どうしたんですか？」
クルマを降りると、かなり年輩の老女が苦しうに身をよじっている。それを、通りがかった若いギヤルたちが心配して様子をみているらしい。
「おばあさん、だいじょうぶ？」
ぼくが肩をゆすると、老女はうつろな目で、ぼくを見上げた。
「心配をおかけして、申しわけありません。急に目まいがして、倒れてしまつて……。時々、こうなるので、心配なく……」

「おばあさん、ひとりであつたのですか？沖繩の人？」
「いえ、熊本の人です。石丸ハルと申します。大正八年の未年の生まれ

で、ことし九十二歳になります……」
声は、弱々しいが、共通語で、言葉もはつきりしている。

「この程度ならば、だいじょうぶよね」
ギヤルたちは顔を見合わせた。その中の一人がぼくに向かって驚きの声を上げた。

「あれえ、もしかして『ロマンチック旅物語』のほりお先生？キヤー、やっぱりそう

クルマの助手席に移した。老女は、手を合わせて、みんなを拝んで感謝の気持ちを示しつつけた。
「よかったね。おばあさん。ちょうどいいところに先生が来てくれて。有名な先生だから安心よ。じゃ、先生、後はよろしくね」

ギヤルたちは、老女の背中を撫でて、ぼくに会釈して、走り去っていった。



だ。こんな所で会えるなんてラッキー！」
ギヤルたちは、老女そっちのけでキヤーアキヤー騒いでいる。ぼくは、照れくさかったし、とにかく倒れている老女を助けなければとギヤルたちの手を借りて、

運転席に戻ると、老女は助手席に深く身を沈めて、安心したのか、穏やかな表情になって、ぼくにゆつくりと話しかけてきた。
「実は、私は、先々月、胃ガンの手術を

しましてね、「余命三か月」と言われたんです」

「余命三か月？そういう人が、こんな所を出歩いていて、いいのですか？」

「いいんですよ。お医者さんにも、外出してもかまわないと言われました。どうせ三か月の命だから、何を食べてもいい、何をしてもいい、というのがガンという病気なのです。お医者さんに見放されたわけですよ。でも私、どうせ死ぬなら、その前に、どうしても糸満市のひめゆりの塔へ行きたいと思ったのです」

ぼくは、はっとした。ぼくもその日、ひめゆりの塔を予定してシボレーをレンタルしたのだった。

「じゃあ、ちよどいい。おばあさん、ぼくのクルマと一緒にひめゆりに行きませんか？」

「本当ですか？ああ、もつたいないこと、ありがたいことで……。では、お願いしてもいいですか？」

というわけで、ぼくとハルさんとの奇妙な縁のドライブが始まった。ハルさんは始終、申しわけなさそうに手を合わせて、ぼくを拝んでいる。

石丸ハルさんは、昭和二〇（一九四五）年、沖繩女子師範学校の学生であった。つまり沖繩戦の犠牲になったひめゆり看護学徒隊の同期生であったという。

だが、当時、病弱だったハルさんは、奇跡的に熊本の親戚の家に送られたため、沖繩戦には従軍せず、当然、集団自決にも加わらなかつた。それがハルさんの生涯の負い目になっていた。いま、余命三か月の間にどうしてもひめゆりの塔に参拝したいと強く思っているのだった。

あの過酷、悲惨な沖繩戦！
太平洋戦争で日本国内唯一の地上戦となった沖繩では、一般住民が激しい戦火に巻き込まれ、空襲をはじめ、米軍の艦砲射撃、飢餓など、極限に追い詰められた。

その熾烈な戦いによる戦没者は、二〇万人余。日本側一八万人。米軍側一万二千人。その中にハルさんたちの沖繩女子師範の学徒たち約二〇〇人が

含まれていた。
ハルさんの身の上話を聞いているうちに、クルマは最も激戦地であった南部戦跡に着いた。ここで、あの悲惨な激戦があったとは思えない、のどかな美しい風景がひろがっている。慰霊碑が立ち並ぶなかにひめゆりの塔があった。もつとも塔といつても、実際は高さ数十センチのもので、さほど目につかない大きさである。

ひめゆりの塔に近づいていくハルさんは、人がちがつたように元気が出て、目を輝かせた。

「やっ、ひめゆりの塔に来られました。沖繩女子師範のみなさん！……しばらくでした！」

ハルさんは夢中で、つぶやきながら、ついに走り出した。だが、体がふらついて、今にも倒れそうである。「余命三か月」では無理もない。ぼくは、遠慮するハルさんを無理矢理、背中におぶつた。老いた身体は思いの外、軽かつた。

それから、ぼくたちは、併設のひめゆり平和記念資料館に入った。ひめゆり学徒の少女たちの名前や写真、地下壕での様子が写真やパネルで展示されている。希望の未来を信じていたのだから、あどけない純真な笑顔の少女たち。ハルさんもこの中のひとりになるはずだったのだ。

ぼくは、背中のハルさんに少しでもパネルや写真が見られるように気を遣いながら、いくつかの展示室をゆつくり回っていた。

ほかに見学者は何人かいたが、どこも静かで重苦しい空気が立ち込めていた。

「ひめゆりの塔」は、沖繩戦末期に沖繩陸軍病院第三外科が置かれていた壕の上に建っている。

「壕」は沖繩では「ガマ」と呼ばれて、当時、各所にいくつも存在した洞窟である。

「ひめゆり学徒隊」は、米軍上陸を阻止できないとみた軍部が女子学生を戦力に組織した。女子学徒たちは、戦局が悪化する戦場で砲撃にさらされながら傷病兵の看護にあつた。やがて米軍に包

囲まれ、洞窟内の野戦病院で、昭和二〇年六月十八日、集団自決で命を散らした。名称は、沖繩第一高女の「乙姫」と沖繩女子師範の「白百合」を合わせて『姫百合』とし、戦後に「ひめゆり」とかな表記したもので、植物のヒメユリとは直接関係はない。

ぼくは、ハルさんをおぶつて、それぞれの部屋の壮絶・非情な証言である多くの展示を次々に見て回つた。

衰弱しきつたハルさんだったが、鋭い目だけは異様に光って写真やパネルを一つ残らず注意深く見つめた。

突然、ぼくは背中にまなま温かいものを感じた。

ハルさんが失禁したのだ。だが、この会場で始末することはできない。

「ハルさん、少し休みましょうか」
だが、ハルさんは首を振つて、そのまま先へ進むように体で指示した。

昭和二〇（一九四五）年三月二十五日。日本国は、沖繩陸軍病院に女子学生一九〇名を看護要員として従軍させた。戦況は次第に激しさを増し、戦闘によって山客が変貌するほどの砲撃戦が展開された。そして五月二十五日、陸軍病院は回復の見込みのない負傷兵や女子学徒を、その場に置き去りにして、本島南部の伊原、山城周辺の地下壕に撤退させた。



取材中の助手・定子さんと筆者

《筆者紹介》
ほりお・こうへい。作家、「日本学術出版」代表。名古屋大学研究室修了。元愛知淑徳大学文学部教授。著書多数。現住所、名古屋市中南区元桜田町四一五五。

知多の動植物雑記(二七二)

原 穰

東日本大震災が発生してやがて二月と、津波で押し流された住宅街の悲惨さに加え、福島原発の放射性物質の漏えい事故など、心痛の日々が続く。

そんな中、東海市での会合の帰りふと立ち寄った新舞子海岸。こゝは、かつて学生時代、当時あった水族館へ魚の生体の不思議な生態を尋ねに立ち寄ったところである。



砂浜や磯で拾った宝物

今は沖の埋立地の一部に、新舞子マリナーパークが作られ、その一部が人工海浜(ブルー・サンビーチ)として海水浴場となっている。

きれいな砂浜だけ、どんな貝殻があるか、私のプラ標本箱の一部であるが、②③は野間燈台付近、④は時志海岸である。

町の考古学 船の歴史(百六十三) 奥川弘成

室町幕府の將軍となつた足利義満は、一三九二年に南北朝の合体を果たし、その後、公家や武家、そして宗教者を差配した専制支配を実現しました。

これより先の一三六八年、中国では明王朝が成立していました。明は、民間の海外貿易を禁止して、日本をはじめ周辺諸国の王に対して官位などをあてて君臣関係を結ぶ大國の覇権政策をとっていました。

室町幕府の將軍となつた足利義満は、一三九二年に南北朝の合体を果たし、その後、公家や武家、そして宗教者を差配した専制支配を実現しました。

朝鮮や中国の沿岸地域では暴行や略奪をする倭寇に手を焼いていました。朝鮮国にとり、倭寇対策が対日外交の重要な課題でした。

なかつたのが「銭」です。古代社会が現物取引の「もの」の交換を基本としていましたが、中世では「ぜい」を仲介して「もの」を交換する貨幣経済が浸透してました。

江姫の嫁ぐ城山さくら咲くはんざきに木戸銭払い赤目滝江に沸く大悲城に初桜

吉田ひろし 悠児 紀江 磯村美耶子 山田博子 関光 里美 塚本千鶴 岩田つとむ 久田三郎 小島篤 村田浩二 加藤久美子 浦崎ひとみ 桑山悦子 富田八重子 江藤八重子 小林美子 井野洋子 竹橋美幸 岩橋キヨ 杉江民子 渡辺達雄 荒川信子 都築信子 中村和弘 中村敏彦 神谷敏彦 柴山敏彦 中村敏彦

研究所：九日(月) 細江治子陶展：十三日(金) 二三日(月)午前九時～午後五時半

ゆめプラザイト総合二〇二一 アトラクション名古屋バスト ラーレ合奏団コンサート：七日(土)午後三時開演 チケット五百円

ちよつとおじやまします 急須職人 前川 修三さん



工務に入ると「どうぞご覧ください」と言わんばかりの急須が目に飛び込んでくる。急須の隣には、1メートル弱と

30数年ほど前に焼きものを始めた前川さんは、急須作りの面白さに目覚め、5年の修行ののち独立し、自己流で挑戦を始めた。当時、焼きものはよく儲かったと、前川さんはニヤリとする。

前川さんはマイペースな人だ。前川さんは自身を根が臆病という。世の中、そんなにマイペースでは生きていけない、思ってしまう。でも、前川さんのような人は結局、何事にも動じることなく強く、最終的には前向きな思考で生きていける人なんだ。

若竹俳壇 作品募集 毎月十日までに葉書で 発行所へ

研究所：九日(月) 細江治子陶展：十三日(金) 二三日(月)午前九時～午後五時半

ゆめプラザイト総合二〇二一 アトラクション名古屋バスト ラーレ合奏団コンサート：七日(土)午後三時開演 チケット五百円

わが家のニューフェイス



堀江 美来 (1才8ヶ月) 豊田市中田町

写	ほ	り	お	だ	い	て	ぱ	し
真	所	い	い	け	か	も	と	て
・	に	毎	が	ど	月	楽	マ	る
文	連	日	け	あ	で	し	マ	よ
	れ	祭	っ	ん	や	の	は	っ
	て	い	し	よ	と	の	や	っ
	行	い	た	も	寝	て	あ	ぼ
	っ	よ	り	上	返	あ	げ	ん
	て	ぬ	ニ	サ	ソ	る	ば	む
堀		れ	ッ	に	カ	の	し	毎
江		ガ	カ	な	で	の	レ	日
明		ら	し	て	た	と	を	練
美		色	た	私	私	パ	パ	習



歌を歌うのが大好き。
 美来は、毎日の練習で、
 歌を歌うのが大好き。
 美来は、毎日の練習で、
 歌を歌うのが大好き。

愛と My Family



稲葉 ひまり 幸樹 (2才9ヶ月) 常滑市錦町

写	な	今	か	の	僕	っ	・	は	手	こ	お
真	ご	度	な	厄	私	た	私	楽	伝	き	父
・	行	は	。	は	が	。	の	し	い	ま	さ
文	き	お	あ	ち	が		お	か	ま	し	ん
	た	餅	ご	ゃ	が		餅	っ	し	た	の
	い	を	く	ん	ん		ほ	た	ま	。	厄
	と	も	楽	と	ぼ		ど	け	し	そ	落
	思	ら	し	落	っ		こ	ど	た	こ	し
	い	い	か	ち	た		い	。	。	ご	に
稲	ま	に	っ	た	か		少	あ	お	お	海
葉	し	、	た	ん	ら		し	ね	餅	餅	稻
朋	た	ま	の	じ	お		泣	あ	を	を	神
子		た	ど	ゃ	父		い	れ	寝	配	社
		み	栗	な	さ		ち	？	す	る	へ
		ん	年	い	ん		ゃ	僕	の	お	行

酒蔵 DE 朗読&トーク 白虎「いのちが喜ぶことば」



いのちをいただくことを意識して食べることが、いかに大切か伝える。
ことの語り
木村まさ子さん



NHK ラジオ毎週月曜から金曜の「ラジオビタミン」でおなじみ
あなうんさー
村上信夫さん

たくさんのお母たちが息づく酒蔵。そこには、多くの「いのち」が宿っています。「いのち」の恵みをいただきながら、「いのち」に感謝をしながらか、「いのち」が喜ぶことばに、想いを馳せる時間を過ごしませんか？心に染みる朗読とトーク、そしておいしいお酒と料理。

「ちたろまん」でおなじみの
村上信夫さんが
常滑に来ますよ。

2011年 5月 14日 (土) 15:30 開場
 第一部 16:00~18:00 (朗読&トーク)
 第二部 18:00~20:00 (食事会)
 会費 6,000円 食事代・酒代込み
 ※一部、二部を併せた会費です。どちらか一方の参加はできません。
 場所 澤田酒造株式会社
 ●お申し込みは、澤田酒造株式会社までメールか FAX で、
 ①参加者氏名、②人数、③住所、④連絡先(日中の連絡先)、
 ⑤連絡のつくメールアドレスを明記してください。
 E-mail sawadasyuzou@hakuro.com
 FAX 0569-35-6953
 ●お問い合わせ/澤田酒造株式会社 TEL 0569-35-4003

創業嘉永元年 (1848年) 澤田酒造株式会社
 〒479-0818 愛知県常滑市古場町4-10
 ◆お帰りは名鉄常滑駅までのバスをご用意しておりますので、ご利用ください。
 ◎お申し込みは極力メールか FAX でお願いします。会社などの FAX から送られる場合は、必ず連絡のとれる TEL を明記ください。
 ◎携帯からのメールは必ず件名に「イベント申込み」と明記してください。無い場合は受付できない場合がございます。

知多半島を牽引していく エネルギッシュカンパニーをめざして。

知多半島に事業所を構えて約70年。私たちはエネルギー分野を中心に、この地に根ざして事業を展開してまいりました。創業以来、どれほど時が移ろうと、絶対に変わらないことがあります。それは「知多半島のために」という強い想いです。生まれ育ったこの知多半島を、日本一元気な、住み良い、豊かな地域にしていきたい。そのためにやるべきことは、今までの事業の形態や常識にとらわれることなく、積極的に取り組んでまいります。皆さまとともに、がんばり、笑い、語り合えるエネルギッシュな集団でありたい。私たちエネチタを、どうぞよろしく願いいたします。

知多半島を愛して、70年



株式会社 大和は、知多半島に事業所を構えて約70年、すべては「知多半島のために」という変わらぬ想いと新たな決意を込めて「株式会社エネチタ」に社名を変更いたしました。